

「神の中に生き、動き、存在する」

使徒の働き 17 章 22-28

- 信仰を生き抜く力 -

今朝、お読みした聖書箇所から、28 節のみ言葉に心を合わせたいと思います。「我らは神の中に生き、動き、存在しています。」私たちが人生のどんな状況に置かれても、晴れの日でも、雨の日にも、風の日にも、嵐の日でも、自分の信仰について、このように言いたいと思います。「私は神の中に生き、動き、存在しています。」と。

ある外国人のテレビ・タレントが少年だった時の話しです。少年時代に、彼はすでに分厚い眼鏡をかけていました。その眼鏡越しに人一倍、彼の目が大きく見えていたため、友だちにからかわれて「ド近眼、めだかー」というあだ名で呼ばれ、いじめられていました。それがいやで、「学校なんか行くもんか！」となりました。それを知ったお母さんが息子を呼び、彼の目をじっと見てこう言いました。「これから 3 つのことを言うから、それだけは覚えておきなさい。①お前がどうであれ、私にはお前は大切な子だ。②お前には愛される価値がある。③お前は役に立つ人間になる。いつかその眼鏡がそうしてくれる。」それを聞いた彼は自分のことも、眼鏡のことも恥ずかしいとは思わなくなったそうです。それどころか、彼は眼鏡をゆすって目を大きく見せてクラスの人気者になったのだそうです。

母親がこの少年に言ったことは、興味深く、一体何を言ったのでしょうか。それは、人が「自分の人生」を「自分らしく」歩むために最も必要な 3 つのことで、セキュリティー、心の「安心感」と言われていることです。「これだけは覚えておきなさい。」と母親が言った、その 3 つとは、「所属感」「有能感」「価値感」です。

今日のみ言葉は、私たちの信仰について同じことを言っています。私たちの信仰生活にも、晴れの日も、雨の日も、風の日も、嵐の日もあります。若い日も老いていく日もあります。それらがどんな日々かは、みなさんが経験されて来たことでご存知ですから、ここで説明は必要ありません。しかし、今日のみ言葉は、信仰が揺らぐときがあってもいい、希望を失うことがあってもいい、祈れない時があってもいい。信仰に紆余曲折があってもいい、それでも、「私は神のうちに生き、神のうちに動き、神のうちに存在している。」そう言い切っていていいと教えます。

その一つ、一つを見ていきたいと思います。

「私は神のうちに生きる」－私には、切っても切れない「神様とのつながり」がある。これが、主にある私たちの「所属感」です。

人は生まれるまでに300日近く、母親の胎の中でと母の命とつながっています。そして生まれてからも、親や家族の腕の中にしっかりと抱かれて育ちます。その結びつきの中で、人は一人ではないことを感じます。人の「安心感」はここから来ます。自分が愛され、受け入れられ、認められていることを知っているからです。そこが、自分の確かな居場所となります。人が成長するにつれて、幼稚園、学校、職場、友人との出会いが、また、教会が安心感を与えてくれる居場所になります。

ところが、「いじめ」「家庭崩壊」「リストラ」が起こってくると、今までの「つながり」がなくなり、そこは、もはや私たちが安らぐ居場所がなくなります。代わりに、不安や恐れが襲ってきます。

そうでなくても、学校には卒業があり、会社には定年があり、家庭には子供の巣立ちがあり、結婚にも愛するものと「別れ」があります。今まで結びついてきたものには終わりがあります。

「死」は、そのすべてから私たちを切り離します。「死」は、所属感、全てのつながり、絆を取り去ってしまうのでしょうか。「私は、創造主である神に生きる」と言える人には、そうではありません。それは、主イエス様が私たちの罪のために十字架で死なれ、死に勝利し復活されたことによって、この神様に結びついて永遠に生きることを意味しているからです。イエス・キリストを信じ、神の子とされている私たちは、こう言うことができるのです。「私は神の中に今もいつまでも生きている。」それが私の所属感、私の永遠の居場所です。

二番目に、「私は神の中に動く。」これは、「お前はできる、役に立つ人間である」と言ったあの母の言葉といっしょです。「有能感」を表しています。私は動く。手が動く。足が動く。口が動く。頭が動く。動いている間はいい。でも、何も動かなくなったら、どうすればいいの？と思うときもあります。終わりですか。いいえ、「私は神の中に動く」－です。「できないこと」、「これからできなくなること」を考えなくていい、恥なくていいのです。

私たちは失敗を恐れます。結婚、子育て、仕事、学業、宣教の働きなどにそれを失敗だと決めつけ、「私はダメだ」と思い込み、また、年令の衰えによって、今までできていたことができなくなることがあります。それを恐れます。神様の「有能感」とは、何でしょうか。

ある水の運び人がいました。天秤棒^{てんびんぼう}を担いで水を運びます。その両端^{りょうはし}には大きな水瓶が前に一つ、後ろに1つあります。一つの水瓶にはどこにも傷がありませんでしたが、もう片方の水瓶にはひびが

入っていました。水の運び人は、主人に頼まれて、川から水を汲んでは、坂道を登り主人のお屋敷まで運んでいました。一つの瓶は一杯に汲んだ水をこぼさずにすべて運ぶことができましたが、ひびの入った瓶の方は途中で水が漏れ、半分しか運べませんでした。

このように、水の運び人は、毎日、御主人の屋敷に水を運んでいました。ひびのない瓶の方は水をこぼさずに運べることを誇りに思っていました。「何と役に立っていることか」と。一方のひびの入った瓶の方は、半分しか運べず残りをこぼしてしまうことに自分が嫌になるほど、引け目を感じていました。そこで、このひびの入った瓶が、ある日、水運び人の親方に言いました。「親方、自分が情けないです。せっかく重い思いをして水を運んでくださってるのに、半分もこぼしてしまっ。ひび割れのない他の水瓶と代えた方がいいのと違いますか。私は役立たずです。」すると、親方は「何で、情けないと思うんだ？」と聞き返しました。「私の瓶からは水が漏れ、いつも半分しか運べません。」

水の運び人は、ひびの入った水瓶に言いました。「川から屋敷までの坂道の道端にきれいな花が咲いているのをお前は知ってたか。」ひびの入った瓶は「いいえ。」と答えました。「いいか。俺はな。お前のひび割れのことは最初から知っていた。それで、道端に花の種を蒔いておいたんだ。それから、お前を道端の方に向けて、お前のひびのから漏れてくる水を種の上にかけてやったというわけさ。毎日毎日お前といっしょになっ！やがて種が芽を出し、花が咲いた。その花を摘んで、お屋敷に持っていくと、御主人様は、たいそう喜んでくれてなあ！ お前にひび割れがなかったら、誰がそんなことに気付いただろう！お前じゃなきゃダメなんだよ！ 」これが、ひび割れのある水瓶の「有能感」です。

自分もっているもの、－自分の時間、性格、その弱さも強さも、そこにひびがあろうとなかろうと、神の栄光が現れるのに、無駄になるものは何一つありません。私たちは「器」です。「神の中に私は動き」の器です。私たちは今もいつまでも神の使命の中に動いているのです。それが私たちの「有能感」です。

最後は、「神のうちに私たちは存在している。」ただ漠然と「私は存在している。」というのではありません。「神のうちに・・・」です。英語の聖書では、「私たちは神のうちに価値ある者として存在している。」と書かれています。神の目に「貴い者として存在している」という自分自身への確信です。それは、どこから来るのでしょうか 見るべきものが2つあります。

一つは、創造主である神様によって私たちが「神のみ姿」に似せて創造されている確信です。それが、「神のうちに私は・・・」の意味です。

「私はあなた（神）に感謝をささげる。

私は・・・・・驚くべきものに造り上げられている。

御業がどんなに驚くべきものか、私の魂はよく知っている。」 詩篇 139:14

「驚くべきものに造り上げられている。」他の聖書では、簡単に「造られている」とだけ書かれています。新共同訳聖書は、わざわざ「造り上げられている」と書かれています。この「造り上げられている」それは、完成、傑作を意味する言葉です。創造主である神様は、今も、ご自分が創造されたものの「貴さ」を一番によく知っておられる方です。

私たちが見るべきもう一つは、主イエスが十字架の上で私の罪のために支払ってくださった代価です。その代価は、主イエスの命そのもので、あまりにも高価です。私たちは、以前は「罪の中に存在していた」者でした。罪の中に存在することは、滅びを意味し、神によって創造された「価値ある者」- 私 - が、廃棄されてしまうことでした。しかし、その滅びから私たちを買い戻すために、イエス・キリストは、ご自分の命を支払ってくださいました。その代価こそが、私の、あなたの「値打ち」を表しています。罪によって廃棄された私が、イエスの十字架によって、完全な形で回復し、今もこれからも「私は神の中に価値ある者、貴い者として存在する。」と、言うことができるのです。イザヤ書 43:4 で、神が「わたしの目にあなたは ^{あたい} 価値 ^{とうと} 高く、貴く、わたしはあなたを愛している。」と、声高々に宣言されている通りです。

今日のみ言葉、「我らは神の中に生き、動き、存在する。」と、私たちは、どうして胸を張って言い切ることができるのでしょうか。

「**我ら**」と「**神**」を入れ替えて読んでみることによってです。

「**神は我ら**の中に生き、動き、存在する。」「神が私の中に生きておられ、神が私の中に動いておられ、神が私の中に存在しておられる。」ですから、「我らは、神の中に生き、動き、存在する。」と言い切ることができるのです。私たちの「所属感」「有能感」「価値感」は、このみ言葉にしっかりと、組み合わされています。人生にどんな大きな揺れが襲って来たとしても、私たちの「信仰を生き抜く力」は、今日のみ言葉によって万全です。

讚美歌「361 番」： **主にありて 私は生きる**

私は主に 主は私に ありて生きる